

NUPACE 帰国学生アカデミック・プログラム全体評価の考察

国際教育交流センター国際プログラム部門

楠 元 景 子

1. はじめに

筆者が担当している名古屋大学交換留学受入プログラム（以下、NUPACE）は、2016年度秋学期に受け入れ人数が急増した。2016年度の年間受け入れ人数は194名に達し、2015年度の147名から約75%の増加である。目標とされていた「年間200名受け入れ」の達成は目の前にあるといえる。それ故に、NUPACEの今後の方向性は、受け入れ人数を増やすというものから、プログラム自体の質の向上へと移行してきている。そこで、本稿では、NUPACE生が帰国する際に記入しているアンケートのデータをもとに、プログラム評価、特にアカデミック・プログラム全体の変化について考察し、NUPACEプログラムの質の向上につなげたい。

2. 帰国前のアンケート調査について

NUPACEでは、学生が帰国する前にアンケートへの記入を呼び掛けている。アンケートはオンラインで入力する形式となっており、次の8つのカテゴリについて問うものである。

- A. 学生の個人情報
- B. 名古屋大学へ留学するための情報
- C. アカデミック・プログラム
- D. 大学のサービス
- E. 施設・設備
- F. 健康
- G. 宿舎
- H. プログラム全体

回答方式は、質問項目によって異なり、記述式と選択式とがある。選択式は、満足度を1（とても不満だった）から7（とても満足だった）の指標で示し、最も当てはまるものを選択する。一方で、記述式は学生に自由に意見や改善点などを記載してもらえるように、自由に記述してもらえるように字数制限を設けていな

い。

今回は、8つあるカテゴリの中でも、カテゴリC「アカデミック・プログラム」に焦点を当て、2015年夏季帰国生から2017年の冬季帰国生のアンケートデータをもとに、アカデミック・プログラム全体の評価の変化を考察した。カテゴリCのサブ項目として、「プログラム全体の評価」、「日本語プログラム・英語専門科目・日本語での開講授業への評価」、「履修していた日本語コースの種類」、「日本語コースの時間数の適切性」、「英語専門科目に対する意見」、「個人指導（GIS）の利用」、「指導教員の評価と意見」、そして、「教育プログラム（全体）に対する意見」がある。

アンケートの回答は、帰国生全員に呼びかけ、80%の回答率を目標としているが、時期によって回答率にばらつきがある。まずは、帰国者全数・アンケート回答者数と回答率を表1に示す。

表1. 帰国者全数と回答率

	帰国者全数	アンケート回答者数	回答率
2015年夏帰国	101	84	83.2 %
2016年冬帰国	42	39	88.1 %
2016年夏帰国	107	81	75.7 %
2017年冬帰国	74	39	52.7 %

3. アカデミック・プログラム全体の満足度

まずは、各時期のアカデミック・プログラム全体の満足度を示した後に、具体的にどの項目が評価に影響しているのかを確認していく。表2から表5の「設問回答人数」は、回答者数の内、設問C1を回答した人数を意味する。

2015年夏帰国者の場合、帰国者数101名に対して、回答者数は84名おり、回答率は83.2%であった。アカデミック・プログラム全体の評価について、表2に実際の人数を、そして、グラフ1に各評価指数の占める割

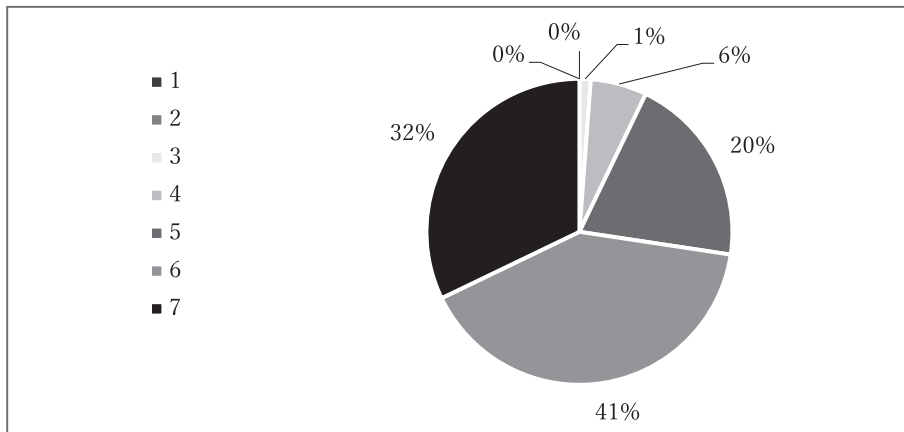
合を円グラフで示した。表2とグラフ1に示す通り、評価指数6を選択した学生が最も多く、84人中34人(41%)である。次いで27名(32%)は指標7と評価している。評価5の17名(20%)が3番目に多く、4番

目には指標4の5名(6%)が続く。そして、評価指数3を選択したのは1人(1%)であり、それ以下の評価指数は0人(0%)である。

表2. アカデミック・プログラム全体評価 (2015年 夏季)

評価	1	2	3	4	5	6	7	設問回答人数
人数	0	0	1	5	17	34	27	83

グラフ1. アカデミック・プログラム全体評価の割合 (2015年 夏季)



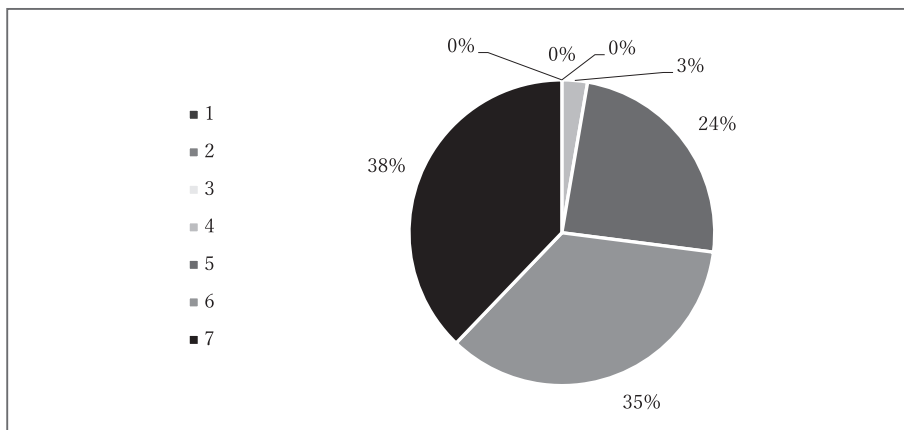
次に、2016年冬季(2月・3月帰国者と2015年12月帰国者)のアカデミック・プログラムの評価を表3とグラフ2に示した。2016年冬季帰国者数は42名、回答者数は39名おり回答率は88.1%に達した。この設問の回答人数は37名である。プログラムの評価についてみ

ると、最高評価指数7を選んだ学生数は14名(38%)である。次に多いのは、評価指数6の13名(35%)である。続いて9名が評価指数5を選択し全体の24%を占めている。そして、2016年度冬季の最も低い評価指数は4であり、1名(3%)がこれを選択している。

表3. アカデミック・プログラム全体評価 (2016年 冬季)

評価	1	2	3	4	5	6	7	設問回答人数
人数	0	0	0	1	9	13	14	37

グラフ2. アカデミック・プログラム全体評価 (2016年 冬季)



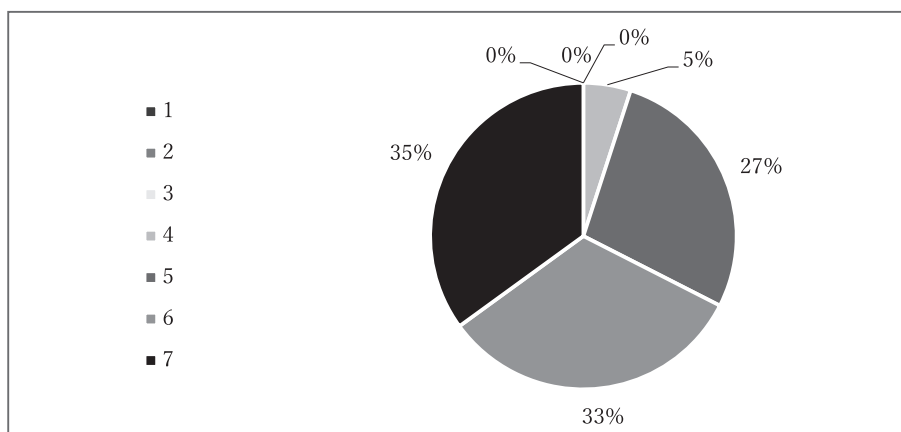
つづいて、2016年夏季帰国生の評価を表4とグラフ3に示した。2016年夏季の帰国者数は107名で、回答者数81名である。設問回答人数は80名である。高い評価指数の7を選択した学生数が最も多く28名（35%）

を占めている。その次に多いのは、評価指数6で26名（33%）である。評価指数5を見ると22名（27%）が選んでおり、評価指数の4を選んだ学生は、4名で全体の5%である。

表4. アカデミック・プログラム全体評価（2016年 夏季）

評価	1	2	3	4	5	6	7	設問回答人数
人数	0	0	0	4	22	26	28	80

グラフ3. アカデミック・プログラム全体評価の割合（2016年 夏季）



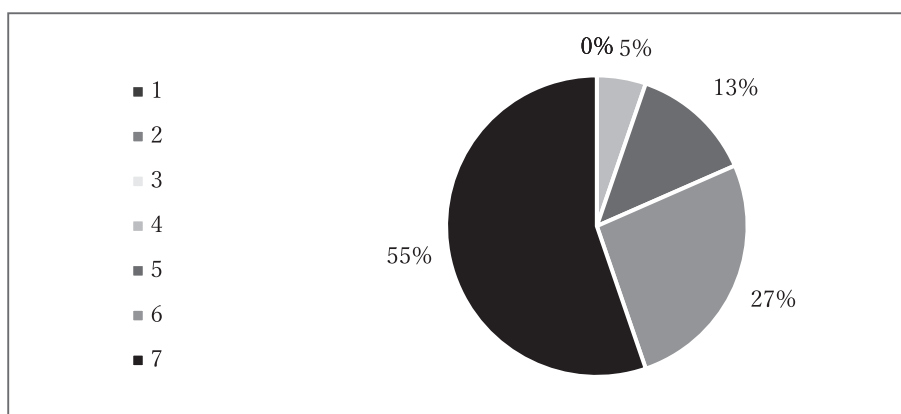
最後に、2017年の冬季（2月帰国者）について表5とグラフ4に示す。まず、帰国者数74名に対してアンケートの回答者数は39名で全体の57.2%を占める。また、設問の回答数は38名である。目標回答率の80%を下回っているが、考察の対象に含めた。次に、プログラム全体の評価についてみる。表5とグラフ4から言えることは、前季と似た傾向がみられることであ

る。最も高い評価指数7を選んだ学生数が最も多く、21名（55%）にのぼる。続き、評価指数6を選択した学生の人数は10名（27%）である。つづいて、評価指数5を選んだ学生は5名で設問回答者人数の13%である。最後に、2名の学生が選択した評価指数は4であり全体の5%である。

表5. アカデミック・プログラム全体評価（2017年 冬季）

評価	1	2	3	4	5	6	7	設問回答人数
人数	0	0	0	2	5	10	21	38

グラフ4. アカデミック・プログラム全体評価（2017年 冬季）



4. 考察

次に、プログラム全体評価の考察を行う。

2016年秋季学期受け入れ人数が75%急増したことで、アカデミック・プログラム全体の評価に下降傾向が懸念されていたが、2015年夏季帰国者から、2017年冬季帰国者までの傾向を見るとその懸念は払しょくされた。

最も高い評価指数7（とても満足している）の傾向としては、2015年夏季帰国と2016年冬季、2016年夏季の三季を見ると、32%、38%、そして、35%であり、目立った増減は見られない。逆に、2017年冬季を見ると、評価指数7の割合は55%に上昇している。

一方で、評価指数6の場合、2015年夏季帰国者は、41%を占めている。つづく2016年冬季は35%に下がり、同年冬季で35%と横ばいである。さらに、2017年度冬季では、評価指数7が増加した分、評価指数6は27%にまで減少した。しかし、評価指数7の割合が増したことにより減少したため、プログラムの評価が下がったと言えず、逆に増した故、評価指数6の割合が低くなったといえる。

評価指数5の動きをみると、評価指数6と似た傾向にある。2015年夏季、2016年冬季、そして、2016年夏季の割合はそれぞれ20%、24%、27%であり大きく変化しているとは言えない。しかし、2017年冬季では、その割合は13%にまで下がったが、これもまた評価指数7の割合が高くなっていることが原因となっている。

最後に、全体の中に位置する評価指数4について考える。2016年冬季に、3%に割り合いが落ち込んだものの、その他の三季は5%と6%の割合にとどまっている。このことからいえることは、評価指数4の割

合は、横ばいの傾向にあるということである。

以上のことから、アカデミック・プログラム全体を「とても満足」（評価指数7）と評価している学生の割合が高くなっていると言える。一方で、評価指数4の割合は大きく変化していないことが言える。また、評価指数6と5が減少したことも確認することができ、人数の増加によってプログラム全体の評価が下がっていないことが確認できる。

5. おわりに

今回は、アンケート調査の項目の中から「アカデミック・プログラム全体評価」に焦点を当てた。「とても満足」を示す評価指数7の低下が懸念されたが、その予想とは裏腹に、本稿の結果が示したのは、割合が増加したことである。一方で、つづく評価指数6と5の割合が低くなり、評価指数4に大きな変動はなかったことも明らかになった。しかし、具体的に、アカデミック・プログラムのどの項目が上記の割合の変化に貢献しているのかは確認できていない。特に、最高指数7の「とても満足している」が増加した要因を探るべきであると考え。逆に、最高指数7を選んだ学生のうち、どの項目に最も低い評価を与えたのかを明らかにすることは、今後の二つ目の課題ともいえる。一方で、最も低い評価指数となった4についても、具体的にどの項目が評価に影響を与えているのかを探る必要があるだろう。そうすることで、NUPACEのアカデミック・プログラムの中で、改善すべき点等を確認することができ、今後のプログラムの質の向上に貢献できると考える。